

2025 年 8 月の総評に代えて      高橋修宏

空だけが残されていて

抜け殻の割れ目は小さな光の滝

常田 瑛子（山口県）

二行目の修辞が、ナイーブさに傾斜しながらも、やはり「小さな光の滝」は美しい。「抜け殻」の主体は、何者だったのだろう。何処へ消えたのだろう。どこか黙示的な気配さえ湛えた作品。

桃を剥く母に造物主の気配

つちや（東京都）

やはり、「造物主の気配」が凄い。この大仰さを、どう見るかがポイントとなるが、古来からの「桃」のもつ多義的な神話性を踏まえて、評価しておきたい。

朝顔が咲く日に殺意を知る子らよ

秋山颯汰朗（群馬県）

唐突な感想だが、かつて実際に起きた幼児に対する無差別殺人事件を想起してしまった。「朝顔」の儚げな美しさとの出会いが、そのまま「殺意」に出会ってしまう悲劇——。そんな誤読もまた、この作品の可能性ではなかろうか。

三つ数えて背に腹を変えている

牛田 悠貴（東京都）

明らかに、〈背に腹は変えられぬ〉のずらし。「三つ数えて」が効いている。既存の故事や諺のずらし、はぐらかしも作品となる好例だが、こればかりだと退屈かもしれない。

鱗粉をくぐった指はもどらない  
わたしの夢へ泣きにくる人

石村 まい（兵庫県）

かつて親密だった相手との破局のイメージだろうか。時間というものの不可逆な酷薄さが、「鱗粉をくぐった指は……」に込められているようでもある。

澤瀉はみんなさんかく田圃に死角

鷺浦 るか（富山県）

「澤瀉」は、日本古来の水辺の植物。「みんなさんかく」は、澤瀉の特徴的なフォルムをイメージさせるが、次に「田圃に死角」と転じている。kaku という韻を踏みながら、どこか地口のような切れのよい気風が魅力的。

イグアナと夕陽を見つめ九段下

澤井 和水（東京都）

一見、「イグアナ」が唐突に思ったが、「九段下」という歴史性をまとった地名に対してのアイロニカルな批評性を感じさせる。

柴犬にしては大きい  
でも

百合の花をくぐるほど小さい  
わたしのおとうと

温子（神奈川県）

まず、物の大きさがはぐらかされた不思議な感触がやってくる。しかし、大きさというものは、主観の中で揺れ、歪み、ときに逆転しているのかもしれない。読み手は、ただ、「わたしのおとうと」の揺れつづける切実な存在感を受け取る。

教室は棺ひかりを跳ね返す

花乃ヲモ（愛媛県）

「教室は棺」という断定ならばありそうな表現だが、「ひかりを……」というだめ押しのような修辞によって、無季の佳句が成立した。

鎮静のくすりを胸に塗るように

水掻き少しひらいて眠る

まちのあき（宮城県）

まず二行目、「水掻き少し……」から遠野物語に登場する河童の伝承などを想起した。だが、一行目「鎮静のくすり……」によって、過去の伝承譚と言うよりも、未来の、いや現在のわれわれに近いイメージが喚起されるようだ。わずか二行だけの不思議な説話か。

六十年目のからだでいい

中腹から

扇状地を見ている

三谷 風子（富山県）

一行目の「からだ」によって、「中腹」、そして「扇状地」が身体性を帯びていくようだ。日常的な振舞いでありながら、細やかな言葉の作用によって、ゆるやかに景観が変容してゆく。

遠泳のひとりは今も太平洋

千坂希妙（大阪府）

「今も……」の一語によって、過去のイメージが召喚される。太平洋上の戦死者か、難破船の溺死者か、あるいは津波で行方不明なままの者たちか。さまざまなイメージが折り畳まれている。